

2013年中国人民大学・北京大学・筑波大学3大学学術フォーラム報告書

開催日時：2013年6月16日（日）
会 場：中国人民大学

開幕式

開幕式では、張昌玉准教授（中国人民大学）より、各大学参加教員の紹介が行われた。それに続き、李銘敬教授（中国人民大学）、李奇楠准教授（北京大学）、小野正樹准教授（筑波大学）より、今回で、第11回目となる本フォーラムの趣旨、および、それぞれの大学における日本語・日本文化研究の状況などが紹介された。なお、本フォーラムには、中国人民大学の教員、大学院生 26名、北京大学の教員、大学院生 8名、そして筑波大学の教員、大学院生 7名の計 41名が参加した。



開幕式の様子



李銘敬教授の挨拶



李奇楠准教授の挨拶



小野正樹准教授の挨拶



参加者の集合写真

分科会

第一会場の分科会では、言語を対象とする 7 件の研究発表が行われた。それぞれの発表タイトルは、以下のようなものであった。

- ・中国語の新語に見られる日本語からの借用語
- ・感情表現の人称制限について
- ・「丁寧」についての日中対照研究
- ・日本法令漢訳研究——21 世紀出版物を中心に
- ・属性の認知過程から見た日本語の可能・難易表現
- ・「V テ」型の副詞についての考察
- ・語彙的複合動詞の V1 と V2 の意味関係についての再考察——コーパスによる実態調査を中心に

以上のように、第一会場の分科会では、日本語からの借用語や、感情表現、「丁寧」についての日中対照研究、日本法令の漢訳を巡る翻訳論など、日本語と中国語の比較を通じた研究、可能・難易表現、副詞、複合動詞などの日本語の特徴に着目した研究など、それぞれの研究分野に基づいた報告が行われた。

本分科会では、他の言語との比較の中で、日本語の特徴を明らかにしようとする対照研究の手法と、日本語内部における細かな分類や規則性に重点を置くアプローチという二つの研究方法が見られた。そのため、質疑応答では、コーパスの使用をはじめとする、方法論を巡る議論が展開された。

第二会場の分科会では、日本の文化、社会を扱う 7 件の研究発表が行われた。各報告のタイトルは、次のようなものであった。

- ・伊勢両宮の性格と地位をめぐる近世の論争
- ・虎関師鍊の十宗観——彼の作品を中心に
- ・福田恆存の *Hamlet* 翻訳—「せりふの主張力」をめぐる
- ・本居宣長の「物のあはれを知る」説——その古代心性への追求
- ・「盆栽老人とその周辺」論—主観的な異化について
- ・伊藤仁斎における「道」
- ・日本企業と NPO との協働から見る戦略的 CSR——取引費用理論による分析

上のタイトルに示されるように、中世禅僧である虎関師鍊の研究にはじまり、伊勢両宮を巡る論争、本居宣長、伊藤仁斎など近世を対象とした研究、福田恆存や深沢七郎といった昭和期の文学者を考察した研究、さらには、現代の日本企業を対象とした報告まで、様々な時代の日本の文化や社会を対象とする分科会となった。

質疑応答の中では、例えば、鎌倉時代の僧である無住と比較した際の虎関師鍊の位置付けという問題や、『盆栽老人とその周辺』が発表された 1970 年代から 1980 年代の日本の経済成長という時代状況を踏まえた上で、現代の中国の状況とも比較することもできるの

ではないか、といった課題が指摘された。本分科会では、これらの議論を通して、それぞれの個別研究を、同時代の状況や文化や社会を巡る比較研究といった、より大きな問題系に位置付けるための方向性や課題が浮かび上がってくるようになった。



分科会の様子



主観性ワークショップ〈言語〉

主観性ワークショップ〈言語〉

本ワークショップは、沼田善子教授（筑波大学）「とりたてと主観性」、佐々木勲人准教授（筑波大学）「ヴォイスと主観性」、小野正樹准教授（筑波大学）「引用と主観性」という 3 件の研究発表に基づき、彭広陸教授（北京大学）、張威教授（中国人民大学）、王軼群准教授（中国人民大学）により、問題点が整理された。その後、フロアも含めた形での討論を行われた。

各発表の概要は、以下のとおりである。

・「とりたてと主観性」

本発表では、「とりたて」に関わる代表的な言語形式の一つである、とりたて詞が取り上げられ、言語主体によって設定される同一領域に存在する事象を、言語主体がどのように関係付けているかが体系的に記述された。その上で、「主観性」という概念を扱う上で、従来のモダリティ研究と重なる、主観の所在（話者の主観か否か）、主観として捉えられるものの質的差異をいかに記述するのかという問題が提起された。

・「ヴォイスと主観性」

中国語では、英語と同様に話者を前景化した客観的把握が行われる一方、日本語と同様に話者を背景化した主観的把握も行われる。とりわけ、中国語では、受身文の多くが不如意の意味を表し、日本語の逆行態やクレル表現のような、行為が話者に向けて行われることを示す文法標識を中国語は持たない。本発表において、従来のヴォイス研究において個別に論じられてきたこれらの現象を、「主観性」という観点を導入することにより、統一的に説明する視点が提示された。

・「引用と主観性」

日本語の引用研究を巡る、1)直接引用、間接引用という話法としての分類、引用を可能とする動詞の種類、2)助詞「と」や補文標識「こと」の選択条件や、間接引用することで

のダイクシスの変化、3) 日本語母語話者や、学習者がどのように引用の方法を学んでいくのかなどという、先行研究の主なテーマが紹介された。そのような研究状況の中で、本来引用は、もともとの発話を「再現」したりする活動であるのに対して、引用文自体に、話者の主観的態度が見られたり、ポライトネスに違反することもある。本発表では、前者を「主観性」の認識レベル、後者を間主観性の発話レベル問題として整理する視点が示された。

以上の3件の研究発表を踏まえた上で、張威教授（中国人民大学）により、「とりたて」、「ヴォイス」、「引用」という言語表現と「主観性」の関係性が改めて整理された。さらに、「主観性」という概念が、その他の様々な言語表現にも見られるものであることが、指摘された。こうした張威教授（中国人民大学）の問題提起を受けて、それぞれの発表内容を題材とした議論が展開された。例えば、中国語における、話者を前景化した客観的把握と、話者を背景化した主観的把握という異なる特徴を巡って、どういう現象を客観的に把握し、いかなる場合に主観的把握になるのかなどの問題点が指摘された。こうした点は、言語によって異なるものであり、他の言語形式まで視点を広げた考察の必要性が明らかになった。その他、大学院生から、とりたて詞や主観的把握と客観的把握を巡る質問が出されるなど、フロアを巻き込んだ形で、「主観性」を巡る言語学の課題が確認された。

主観性ワークショップ〈文学〉

本ワークショップでは、近本謙介准教授（筑波大学）「古典文学における主観の読み替えと展開——座の文芸と芸能の視座から」、平石典子准教授（筑波大学）「近代文学における自意識——テキストの読み替えをめぐる」、干栄勝教授（北京大学）「文学作品の翻訳と主観性を考える——『こころ』の中国語翻訳を中心に」という3件の研究報告が行われた。その上で、戴煥講師（中国人民大学）、小野正樹准教授（筑波大学）により、問題点が整理された。その後、参加者も含めて討論が行われた。

各発表の概要は、以下のとおりである。

- ・「古典文学における主観の読み替えと展開——座の文芸と芸能の視座から」

本発表では、作品そのものが複数の人間（たち）によってかたちづくられることを前提とする連歌という「座の文芸」において、「主観性」の問題をどのように定位することができるかが焦点化された。連歌においては、和歌の上句と下句にあたる「5・7・5」と「7・7」を、その座に連なる衆（連衆）が「付ける」営みによって、それぞれの「主観性」によって展開させていくわけであるが、このとき主観はどのように読み替えられ展開していくのかという問題の検証を通して、芸能との関わりについても言及しながら、「主観性」の読み替えや重層性を支えるのが「知の共有」ではないかという問題提起が行われた。

- ・「近代文学における自意識——テキストの読み替えをめぐる」

本発表では、「主観性」を巡る日本の近代文学の主要な問題点の一つである「自意識」が取り上げられた。具体的には、芥川龍之介（1892-1927）の「王朝もの」「開化もの」と呼ばれる作品から、テキストの読み替え、という作業の分析が為された。その中で、ピ

エール・ロティ (Pierre Loti, 1850-1923) の「江戸の舞踏会」《 Un bal à Yeddo 》と芥川の「舞踏会」を比較した際に確認できる、視点の移動が提示された。以上の報告を通じて、こうした差異にこそ、近代世界の価値観のせめぎあいが出ているのだという、日本の近代文学における「主観性」の問題の一側面が紹介された。

・「文学作品の翻訳と主観性を考える——『こころ』の中国語翻訳を中心に」

本発表では、日本文学の中国語への翻訳の問題を巡って、意味内容と表現形式の問題から、夏目漱石 (1867-1916) の『こころ』の具体的な翻訳を例とした考察が展開された。その中で、日本文学作品の中国語翻訳者は、原点 (起点テキスト) を客観的な翻訳対象として、原作に忠実だということを翻訳の原則と考えて、原作の意味内容を忠実に訳本の読者に伝えるべきではあるが、しかし、原作に縛り付けられ、原作の文体を一字一句まで忠実に翻訳する必要はないとの指摘が為された。以上のように、翻訳者による主観的な創作という視点から、「主観性」を巡る考察が示された。

以上の3件の報告内容を踏まえた上で、戴煥講師 (中国人民大学)、小野正樹准教授 (筑波大学) により、「知の共有」、「典拠の読み替え」、「翻訳」という3つの問題点が整理された。その上で、「知の共有」という問題を巡り、李銘敬教授 (中国人民大学) より、古典文学研究の立場からの発言が為された。具体的には、類書、抜書きや注釈などと「知の共有」という視点の関連性などが議論された。その他、「カノン」形成の問題や、「翻訳」に見られる「誤読」、「誤訳」の問題などが提起されるなど、「主観性」の問題を出発点とした本ワークショップの問題点の一つとして、異文化間の交流の問題が見出された。



主観性ワークショップ〈文学〉①



主観性ワークショップ〈文学〉②

閉幕式

まず、大学院生の代表、張玉玲氏（北京大学）、胡照汀氏（中国人民大学）の二名により、分科会の報告が行われた。続いて、ワークショップの報告を、佐々木勲人准教授（筑波大学）が行った。今回のワークショップでは、「主観性」というテーマの下に、言語学と文学合わせて6件の研究報告が行われた。これらの報告や討論で提起された問題も含めて、「主観性」には多様な捉え方があることが、佐々木勲人准教授（筑波大学）により、あらためて確認された。

その後、総評として、沼田善子教授（筑波大学）が、言語形式の制約など、言語のすみずみにいたるまで見出されることになる言語学の「主観性」の問題と、世界の捉え方や知のありようなどに広がっていく文学における「主観性」の問題という見取り図が示され、その中で、領域を超える発想の必要性が問題提起された。

最後に、閉会の挨拶として、張威教授（中国人民大学）より、中国人民大学、北京大学、筑波大学の教員、大学院生が参加する本フォーラムは、各大学院生の研究発表、議論の場となることはもちろん、分科会の報告を大学院生が担当することなど、様々な面で、各大学院生の研究者としての資質を高めることを目的としていることが確認された。



分科会の報告



ワークショップの報告



総評